

2017年1月19日～20日(全日程:1月17日～21日)、インドネシア、ボゴール農業大学で開催された“International Symposium in Veterinary Science”に参加した。日本からの参加者は山口大学、鹿児島大学、鳥取大学より教員9名(含、山口大学三浦副学長、佐藤連合獣医研究科長)、職員2名、大学院生8名、インドネシアからの参加者はインドネシア11獣医系大学の学部長、教員、学生であった。シンポジウム1日目は始めに日本の3大学の獣医学部の紹介、インドネシア11獣医系大学の紹介が行われた。その中で各大学・学部の構成、カリキュラム、特徴的な研究内容等が紹介された。インドネシア側の研究内容としては人獣共通感染症(鳥インフルエンザ、ウエストナイル熱、炭疽、ブルセラ症、トキソプラズマ症、狂犬病等)、ウイルス(コロナ、ニパ)保有動物としてのコウモリ、薬草学、食中毒、野生動物の解剖学・感染症・GPS追跡、幹細胞、繁殖学、水生動物、ワクチン開発、飼料のプロバイオティクス等が紹介された。また、日本とインドネシア間での連携強化における構想、希望等も話された。日本側での連携の提案として、今回のようなシンポジウムを今後も継続して行っていくことや予算の獲得に努力すること(その為には研究紹介等の場を多く持つことが必要であること)、具体的な共同研究の例としてインドネシアにおいて貴重な検体の収集・作成や核酸抽出までを行いその後の遺伝子解析等を日本で行う等の形が話された。インドネシア側からは、共同研究により論文発表を増やすことへの希望が強く感じられた。その後、各教員および学生によるフリートーク形式のポスター発表が行われた。当人は“家猫における感染性を保有する内在性レトロウイルス”についての発表を行った。当発表を評価して下さったインドネシア側の参加者もいたが具体的な共同研究の話などには至らなかった。只、当方が期待するインドネシアの各種ネコ科動物の検体(DNA)入手などは連携の仕方により可能であることが話された。その他の発表の場では日本への留学(大学院生)の可能性などについても話されていた。その後、ボゴール農業大学内の各種施設の見学が行われた。始めに現在準備中のBSL3を含む実験室(SATREPSでJICAが主体となり山口大学も協力している事業)を見学した。機器類は各種解析に十分なものが揃っていた。2017年冬頃の稼働開始を目指しているが準備状況は当初の予定よりも遅れているようであった。その後、動物病院、実験動物施設、大動物教育研究施設の見学を行った。学内は定期試験後の休暇期間中のため教員・学生共に疎らであったが、病院ではエコー、耳科診療、レントゲン検査等が行われていた。施設としては一般的なレベルのものようであったが、やや旧式の機器が使用されている、実験動物施設では一部逃亡防止処置がなされていない等も見られた。大動物としてはインドネシア固有種を含む牛、馬が飼育されていた。インドネシア11獣医系大学の教員間には強い繋がりが形成されており、シンポジウムは和気藹藹とした雰囲気で行われた。また司会や食事会の設定等はボゴール農業大学獣医学部の学生により行われたが、どの学生もホスピタリティがあり活気があった。

シンポジウム2日目は始めに牛生産農場(PT. Sari Rejo Bumi Tapos, Ciawi)を訪れた。日本の中規模程度の農場であるが、熱帯性気候のインドネシアの中では高地にあり気温が比較的低いことにより良好な飼育状況を生み出されているようであった。肉牛における去勢は行っていなかった。また祭事用の牛の飼育も行われていた。その後は“Taman Safari Indonesia”(サファリパーク)を訪れた。かなり広い敷地があり、動物の飼育状況としては良好と思われた。動物と接触する場やショーが多種設けられており教育及びレクリエーションの場としての価値は高いように思われた。最後は“Chimory Riverside”にて最終の食事会が行われた。渓谷沿いに位置するレストランのためコウモリが盛んに飛んでおり蚊の多さが伺われた。

ボゴールはインドネシアにおいて3～4番目の規模の都市であり山口市と比較しかなりの都会であった。交通はルートの少なさに起因する渋滞が深刻であったが、現在新たな新幹線の開通も目指しており改善されることが予想された。帰国後日本側メンバーの殆どが風邪等で体調を崩し、熱帯性気候の国を冬期に訪れる際の体調管理やその為のスケジュール調整の重要性が再認識された。